

小学校音楽会における問題解決および 創造的な学習活動の発露に関する一考察 —教員間の連携に着目した実践的研究—

渡辺 行野

はじめに

新学習指導要領では、近年のグローバル化や人工知能・AI等の技術革新が急速に進む中で、これからの社会に対応できる教育方針として、AI等の先端技術が持つ有用性を十全に活かすことが期待されている。一方で、子供たちには資質能力の伸長が目指され、その中でも様々な問題解決と創造的な力が必要になることが示唆されている（文部科学省、2017）。具体的には「自ら課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、自ら判断して行動し、よりよい社会や人生を切り拓いていく力」が求められている。さらに「資質・能力」として学んだことを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力、人間性」、実際の社会や生活で生きて働く「知識及び技能」、未知の状況にも対応できる「思考力、判断力、表現力」の三つの柱は、授業実践の場面において互いに関連し、一体化し合いながら育成されることが求められている（国立教育政策研究所、2016）。これらのことから、資質・能力を育成するためには、問題解決および創造的な学習活動が補完し合いながら実践されることが希求される。

欧米では、芸術の授業に多くの時間を使っている児童・生徒ほど、「創造的思考力」の能力が向上していることが明らかにされている（菅野 2015）。また、創造的思考の過程には問題解決場面が伴い、STEM教育からSTEAM教育への進展においては、アート（Art）における「創造的思考力」が注目されている。さらに、「芸術への参加は、自発性と自己表現を育て、阻害効果を緩め、創造的な結果を導くことができる。それは、創造的な努力と裏腹の心配、挫折、失敗を乗り越えるのに必要な粘り強さに注意を意識できるようにする（D. A.Sousa2017）。」と示唆されているように、現代では音楽を通して「何が学べるのか」という視点についての検証が求められている。

では、学校教育における音楽学習場面から得られる力とはどのようなものなのか。小学校現場では、音楽の授業は勿論のこと、行事や式典等において必ず音楽が使用され、音楽に始まり音楽に終わることが一般的であり、それ故に音楽の位置付けは重要だと考えられる。学校教育の中における音楽学習とは、音楽の技能を習得することも目標の一

部となるが、音楽学習を通して何を学ぶのかという視点が必要であり、「注意すべきことは、芸術教育が芸術家になりたい児童生徒のためという考えを受け入れるべきでないことである（D. A.Sousa2017）。」とされるように、学校教育における音楽学習の過程を重視し、その中から見えてくる一人ひとりの学びや心的成長、さらに子供たちの変化を考察することが重要である。そこで、本研究では小学校の音楽会に向けての学習活動に着目する。そして、音楽学習を通しての問題解決および創造的な学習の発露を、時間的経過における児童の心的成長やその変化について分析する。また、音楽会を通して子供たち自身が何を獲得できたかを考察する。さらに、音楽専科と担任には教員間連携を意識させ、教員の指導・支援による子供たちへの影響やその変容にも着目する。

1. 学校行事における音楽会の位置付け

学習指導要領において、学校行事は特別活動に位置付けられ、音楽会は文化的行事として扱われる。特に、「小学校では文化的行事の実施日数が中・高よりも多く、小学校での音楽会実施は、文化的行事における構成項目の中でも上位な活動とされている（中村、2016）」。また、音楽会の為に、日頃の学習活動を行事練習にせざるを得ない状況等もある。行事に向けての練習の為に教科学習があるわけではないという批判はありつつも、未だ小学校においては行事に向けての取組みは多い。一方で、行事への取組みは「日常の学習活動に基礎をおきつつも、親と子の交流の場として、また学校生活の重要な節目の一つとして機能を果たしている（中村、2016）」とも示唆されており、学校教育においてその教育的価値の高さが伺える。また、文化的行事への取組みについての調査報告として「演劇力・表現力よりも、①協力・協調性、②絆・団結力を挙げる者が多く見られた」と示されており、「特別活動の基本原理である『望ましい集団活動を通して』人間関係の形成、集団への所属感や連帯の深まり、協力など、特別活動のねらいに準拠した力が育っている」と文化的行事の意義が述べられている（中村、2016）。文化的行事に向けての活動では、音楽的な技能や表現を培うことと同時に、活動過程における一人ひとりの問題解決的な場面における学びや、個人・集団で音楽に取り組むことから生まれる創造的発展が一人ひとりの資質・能力を深化させていく可能性がある。

中村（2016）は、文化的行事への取組みを「①多様な人間関係を通して他者理解を深め、信頼できる人間関係が構築され、学級集団への帰属感や成員間の連帯感が醸成される。②集団内での役割と活動を通した成就感や達成感および所属意識の形成、個や集団の役割課題と向き合う力と意欲の形成、実践的行動力が育成される。③活動への巻き込みに

より文化活動による居場所づくり、④より良い生活習慣や学習習慣の形成、規律ある学校生活、規範意識、市民性の基盤の育成等、ソーシャルボンドの構成要素それぞれにおいて育まれる資質・能力を挙げることができる」としている。一方、学習指導要領における文化的行事は、『『平素の学習活動の成果を発表』し、『文化や芸術に親しんだりするような活動を行う』ために教科との関連が深いことにある。またそこには人間関係や集団としての向上を意識したねらいに準拠した活動が求められる。』と示されていることから、音楽会における学習では、集団と個の活動に対する取組方法に教師がどのように意識的に介入するかが重要となり、音楽専科と担任の教員間の連携を伴った適切な指導・支援の必要性が求められる。

2. 教員間の連携

音楽会に向けての学習活動では、音楽専科と担任の協働から成る教師間の連携が不可欠となる。これは学校全体の活動において共通して取り組まれていることだが、「学校における働き方改革に関する対策」においてもそれぞれの業務を適正化し、チームで運営に取り組むことが指摘されている（文部科学省，2019）。授業において、教師との連携を行うことや行事での活動は、教科等の指導と共同して行うこと、また指導計画においても、複数の教師が協力して作成し共有化するなどの取組みを推進している（文部科学省，2019）。教員間の連携や協力体制を活かした子供への学びを生み出すうえでは、担任だけでなく教職員全体で指導・支援することが重要である。音楽会に向けての練習を考えた時、以下のプロセスがある（図1）。その際、常に担任と専科の情報共有と、その活動場面における子供の姿の共有、音楽会に向けて一人ひとりの子供への向き合い方に関する共通理解が必要となる。特に、音楽会に向けての取組みに関しては期間も長いことから、子供の意欲継続や場面におけるつまずき、学びの達成度の視点からも、音楽専科と担任がそれぞれの立場における考えや気づき等を活かして子供への指導・支援に入ることを意識していくことが重要である。その為にも、常に情報交換と子供の姿の共有を図ることが求められる。

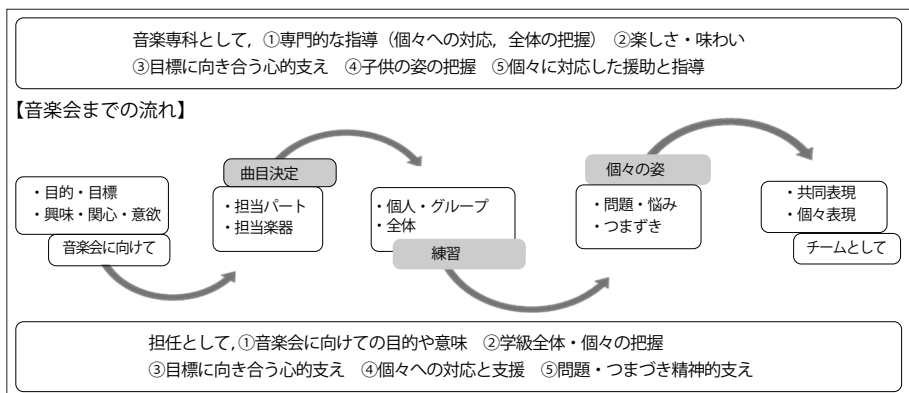


図1 音楽会の過程による担任と音楽専科の教員間連携

3. 研究方法と調査結果

A 県の小学校、第4学年の担任と音楽専科にはあらかじめ教員間の連携を意識することを確認している。それぞれの教員の立場や役割を整理し、子供たちと関わることをとする。対象となる小学校の第4学年は、10月に校内の音楽会を経験し、11月には学年全員が出演する班の音楽会（歌・合奏）を迎える。班の音楽会を経て、さらに数週間後に町の音楽会（班の音楽会の歌・新しい歌）を経験する。この調査は、班の音楽会に向けての期間に着目して実施することとする。

【対象】A 県内の小学校、第4学年の2学級（49名）

【実施期間】2018年9～12月

【調査内容・方法】班の音楽会の練習開始から終了までの子供たちの取組み過程を3段階に分け、①班の音楽会へ向けて、②中間過程の練習への意気込み、③音楽会を終えての最後の振り返りを通して「質問紙調査」を行い、子供たちの変容を計る。また、音楽専科と担任に「インタビュー調査」を行い、教員間の連携から見えてきたことに関して調査分析を行う。

（質問紙内容）

①音楽会に向けて〈自由記述〉

- ・どんな音楽会にしたいですか。
- ・そのために、自分にはどんなことができますか。

②中間調査〈自由記述〉

- ・今、どのような気持ちで練習に取り組んでいますか。

③音楽会を終えて〈選択項目・自由記述〉

・「どんな音楽会にしたいか」を実現できたか。

・自分にできることはしたか。

・音楽会を通して成長したか。

以上の問に関して（とてもできた・できた・あんまりできなかった）の3件法

・音楽会を終えての感想

3-1 質問紙調査の結果

①音楽会に向けての質問紙調査による自由記述

表1 どんな音楽会にしたいのかに関する記述

【自己感情】	<ul style="list-style-type: none"> ・楽しい音楽会にしたい。 ・みんなが笑顔になれる音楽にする。 ・つかかかないようにする。 ・練習のときよりも、もっともっとうごい演奏をして頑張れたと思えるような発表。 ・きれいな歌声で、失敗ないように練習をする。 ・きれいに失敗しない音楽会。 ・いつも以上にきれいな声で、いつも以上にすごい合唱をしたい。 ・ミスをしないうで迫力のある合奏と歌をきれいな声で歌って、終わった後にみんなが良い気持ちになるようにしたい。 ・失敗しないで終わる音楽会。 ・間違えても、みんなが「すごい」と思ってくれるような音楽会にして、悔いのないようにしたい ・諦めないで、良い、きれいな美しい音楽会。 ・間違えないで、とっても良い音楽会。 ・集中して覚える。 ・きれいな声と楽器を間違えないようにする。 <p style="text-align: right;">(13名)</p>
【承認欲求】	<ul style="list-style-type: none"> ・みんなに「4年生すごいね」と言わせる音楽会。 ・失敗しないで、みんなが「すごい！」「いい音楽だな。」というような音楽会。 ・失敗しないで、楽しく大きな声で元気よくやりたい。 ・みんなが「きれいな歌声だな」と言ってくれる歌。 ・みんなが楽しくなって、12356年生のみんなが「4年生すごい〜」って言うようなすごい音楽会にしたい。 ・お家の人、町の人などがくるので、しっかりした態度で頑張る。 ・聞いたり、見に来てくれたりする人に、「すごいな？」と言われてもらえるような音楽会。 ・すごい演奏をして、他の人に「すごい」と思ってもらえるような音楽会。 <p style="text-align: right;">(8名)</p>
【他者・協力】	<ul style="list-style-type: none"> ・みんなと声を合わせて、みんなですごい音楽にする。 ・みんなが協力して、色々な人に「今年の4年生は、すごかったね」と言ってもらえるような音楽会。 ・協力してきれいな音が出る音楽会。 ・失敗せずに良い歌声、声量とかをみんなに合わせてやりたい。 ・みんなが協力して、どんな学校にも負けないすばらしい音楽会。

	<ul style="list-style-type: none"> ・みんなで協力し、歌や合唱を合わせたりし、きれいな音や声を出す。あと、笑顔で明るく歌を歌う。 ・みんなで楽しく仲良くできて、みんなが笑顔になれる音楽会 ・みんなで力を合わせて、すてきな音楽会にしたい。 ・歌できれいに合わせたり、間違えないでピタリと揃っていたりする合奏をしたい。 ・みんなと息ぴったりなタイミングで、小学校代表の４年生として、みんながニコニコで音楽会を終われるようにしたい。 ・毎日間違えないように、みんなと協力して本番に向けて頑張ります。 <p>(11名)</p>
【客観的捉え・全体・音楽的観点】	<ul style="list-style-type: none"> ・きれいな音色のひびく音楽会。 ・盛り上がるような音楽会。聞いている人が「いい音だな」と思える音楽会。 ・みんなの声や楽器の音が重なったきれいな音楽会。 ・きれいな合唱や合奏の音楽会。 ・みなさんを楽しませたり、感動させたりするような音楽会。 ・見てる人がいいなと思う音楽会。 ・お客さんが楽しんでくれて、自分たちも楽しめる音楽会。 ・聞いている人や演奏している人、みんなが笑って楽しめる音楽会。 ・みんなが楽しくなるような音楽会。 ・みんなが楽しめるような音楽会。 ・とってもきれいな音楽会。 ・みんなが楽しめる音楽会。 <p>(12名)</p>
【自己と他者】	<ul style="list-style-type: none"> ・楽しく、自分の思いを伝えられる音楽会。 ・お客さんが「ゆかいに歩けば」なら楽しい気持ちに、「大切なもの」なら思わず泣きたくするような、色々な気持ちになれるような音楽会。 ・聞いている人が泣けるような音楽会。 ・お客さんも自分たちも楽しめる音楽会。 ・見てる人も、みんなが感心して驚いて「すごいなあ」「聞いていて楽しいなあ」と思えるような演奏や歌を披露したい。 <p>(5名)</p>

自由記述については全ての解答に対して筆者がKJ法を用いており、表1では「自己感情・承認欲求・他者との協力・客観的な捉えや音楽的観点・自己と他者」に分類した。そこにはいずれも、子供たちの内面にある様々な感情が見られた。子供たちの音楽会への好奇心や興奮、意欲の高まりが見られ、音楽会へのイメージを広げながら、それぞれが音楽会までの過程を一生懸命に取り組もうとする姿が読み取れる。「きれいな、すごい、楽しい、」等といった抽象的なコメントが見られ、技術面や具体的な個々の目標というよりは意欲や感情の高揚、これから取り組む音楽会への期待感が伺える。

表2 その為に自分はどのようなことが出来るかに関する記述

【意欲・気持ち・高揚】	<ul style="list-style-type: none"> ・みんなにすごいねと思わせるパーティみたいな音楽会にしたい。 ・もっと盛り上げなきゃだめ。 ・自分の思いを伝える。 ・ふざけている人がいたら注意する。
-------------	--

	<ul style="list-style-type: none"> ・1回1回を大切にします。 ・きれいに歌う、きれいな音を出す。 ・きれいな声で、笑顔でいる。 ・きれいな歌声で、間違えずにたくさん歌って、きれいな歌声で歌えるように頑張る。 ・笑顔で歌ったり、間違えても最後まで乗り切れたりするようにする。(9名)
【練習】	<ul style="list-style-type: none"> ・きちんと練習する。速くならない。 ・鍵盤ハーモニカとピアノを頑張って練習すること。 ・いっぱい練習して、良い演奏ができるようにする。 ・失敗を積み重ねながらも、いっぱい練習をしてみんなときれいな音楽を合わせる。 ・練習してきた成果を存分に発揮できるようにする。 ・毎日練習をして元気に歌う。 ・鍵盤ハーモニカをうまくなる。 ・歌が変わる度に、自分の声の高さなどを変える。 ・合奏は、テンポに遅れないようにする。失敗してもやり続ける。 ・音楽の一人として頑張って、歌ったり合奏したりしたい。 ・きれいな声で歌うこと。 ・ぼくはリコーダーなので、音楽会に向けて、自分から進んで練習する。 ・いっぱい練習をする。 ・全体の行動が速くなるように心掛けをし、注意する。 ・一生懸命練習をして、話をしっかり聞き、たくさん練習してうまくなる。 ・頑張って必死に練習して、本番のときに成功させたい。 ・自分の楽器をしっかりと練習して、本番で間違えないように演奏したり、きれいな声で歌えたりするように頑張ります。 ・姿勢を正しく、間違えないようにたくさん練習する。 ・毎日休み時間に集まって練習する。 ・家に鍵盤を持って帰って練習する。 ・たくさん練習をしたり、その練習を真面目にやったりすることができる。 ・たくさん練習して、自分も全力で力を出し切る。 ・いっぱい練習する。 ・しっかり、間違えないようにやりたい。 ・練習をして、かんべきにすることができる。 ・緊張はするけど、自分もミスをしなくてやることができる。 ・先生のアドバイスで言われたことをやる。 ・たくさん練習をする。 ・たくさん練習してうまくなれるようにする。だれかが間違っていたら、正しいことを教える。 ・自分の担当の楽器を練習する。 ・2時間目休みと昼休みの楽器練習を頑張りたい。(31名)
【協力・合わせる】	<ul style="list-style-type: none"> ・先生に言われたことをしっかりと聞き、それができたら「みんなで作ろう」などと声を出し、みんなで上手にできるようにする。 ・みんなのいいところを見つけて、それを真似して覚えることができる。 ・みんなも応援したいし、自分もリコーダー等を上手にして達成感になれるように頑張る。 ・合唱は、みんなのペースに合わせて、勝手にやったりしない。

	<ul style="list-style-type: none"> ・良い声、声量を合わせる。 ・パートを歌う場所を間違えないできれいな声で歌う。楽器に合わせて、指揮者を見ながらリコーダーを吹く。 ・4年生みんなで支え合って、演奏も、たくさんの人達に聴かせられるような楽しい演奏するために練習して頑張る。 ・練習までに声を戻す。合わせて何回も練習。 ・木琴をやるので、木琴のみんなとたくさん練習をして、みんなと音がそろうように休み時間に早めにきて、みんなが来るまで苦手なところを練習します。 ・リコーダーや小太鼓や他の楽器とタイミングをなるべく合わせる。(9名)
--	--

ここでは「意欲や気持ちの高揚・練習・協力して合わせる」に分類した。一人ひとりの意欲の向上と共に、自分達のイメージする音楽会が達成できるまでには、「練習」が必要であることを意識していることが分かる。また、音楽専科の指導から目標を明確にしていくようなコメントも見られ、指導への期待が読み取れる。さらに、個々のことばかりでなく他者へ目を向ける内容のコメントが見られ、「協力・合わせる」という意識が感じられる。仲間と共に音楽をつくりだしていく為には、個々の努力と練習の成果も必要となることを理解していることが伺える（表2）。こうした背景には、音楽専科の技術指導と、担任の子供たちへの支援があり、一人ひとりへの配慮が影響していると考えられる。

②中間調査としての質問紙調査による自由記述

表3 今どんな気持ちで練習に取り組んでいるかに関する記述

【自己に関して】	<ul style="list-style-type: none"> ・楽しい音楽会ができるように。 ・真剣に頑張ろう。 ・まず楽譜を覚えたい。 ・音楽会に向けて、成功するぞという気持ち。 ・失敗したらダメ。 ・「上手になるぞ」「盛り上げるぞ」という気持ちでやる。 ・自分達にとっては、6年に1回の音楽会だから、6年の思い出に残るようなステキな音楽会にしたい。 ・本番になったら、どのような歌、どのような声になるのかな。 ・覚えて間違えずにやりたい。覚えられるかな？と思っている。 ・音楽会を成功させて、みんな悔いがないようにしよう。 ・良い音楽会にしたいと思いながら。 ・きれいで完璧な音楽会にしたい。 ・失敗しないかな～声が治ってほしい。 ・みんなで悔いのない音楽会にしよう。 ・これは本番だ。ここは本番の書だ。ミスをしないぞ。 ・良い音楽会にしたいから、頑張ろう。 ・絶対本番で成功させたい。 ・音楽会で「すごい」と思ってもらいたい。 ・良い音楽会にしたい。(19名)
----------	--

【練習】	<ul style="list-style-type: none"> ・楽器を頑張ろう。 ・本番で失敗したくない。いっぱい練習して上手になりたい。 ・本番に失敗しないで練習も頑張る。 ・みんなで、色々な人がすごいと思うような音楽会にするために、間違えないように正確に頑張っている。 ・本番で失敗しないように一生懸命練習しよう。みんなの足を引っ張っちゃったらいけないと思って練習している。 ・みんなが頑張っているな、自分も頑張ろうと思って。 ・本番で失敗しないように、たくさん練習して完璧にしよう。 ・いろんな人に聞かせたいと思って、熱心に練習している。 ・全部覚えるくらい取り組んでいる。 ・これまでたくさん練習したので、本番に間違えなければいいな。 ・間違えないで、楽器を練習する。歌も間違えないように練習をする。 ・よろこんでもらえるように練習。 <p style="text-align: right;">(12名)</p>
【合わせる】	<ul style="list-style-type: none"> ・みんなで協力して、上手な演奏にできるようにしよう。一人でも失敗したらダメだから、上手にできるようにきっちり練習しよう。 ・みんなでちゃんと合わせられるように真剣に楽しく取り組む。 ・みんなときれいな音楽を作りたい。 ・速くなってしまうから、少しでも合わせるという気持ち。 ・もっと音がそろうように頑張ろうという気持ち。 ・みんなで合わせるのが難しいので、たくさん練習しよう。 ・みんなの足手まといにならないようにみんなのペースに合わせるぞ。 ・みんなの心が一つにまとまって、みんなが、ニコニコ笑顔で終われるように失敗しないように。 ・みんなと合わせなきゃ。 <p style="text-align: right;">(9名)</p>
【他者意識】	<ul style="list-style-type: none"> ・いい音楽会にしたいな。 ・弟にも気に入られる音楽会にしたい。 ・聞いてる人に楽しんでもらえるように。 ・お客さんを感動させられる音楽会にしたい。 ・みんなが喜んでくれるようにしたい。 ・自分の思いが届いてほしいという気持ち。 ・見ている人が笑顔に楽しくなれるといいなあ。 ・みんなと楽しくできたらいいなあ。 ・きれいな音で、響く加減を調節して取り組んでいる。 <p style="text-align: right;">(9名)</p>

ここでは「自己に関して・練習・合わせる・他者意識」に分類した。中間練習の期間に入ると、子供たちの不安要素が見られる。練習意欲や音楽会への情熱はあるものの、間違いや失敗に関する不安や音楽会で失敗してしまうかもしれないという恐怖感も見られる。一方で、だからこそ練習することが必要であることを自覚しているコメントも見られる。また、個や仲間・他者との関係だけでなく、聴きに来る観衆に対してのコメントも見られ、視野の広がりが見られる（表3）。不安要素を抱えながらも全体的に否定的な意見が少ないことから、教員間の指導連携が子供たちを支援しながら意欲の継続に寄

与している可能性が考えられる。

③音楽会を終えての振り返り選択項目

表4 取組みへの達成度

質問項目	◎	○	△	無回答
「どんな音楽会にしたいか」を実現できたか	34	13	0	2
自分にできることはしたか	43	5	0	1
音楽会を通して成長したか	30	15	2	2

(とてもできた◎, できた○, あまりできなかった△)

「とてもできた」と「できた」には、ここまでの活動を肯定的に捉えたコメントが多かった。一方、「あまりできなかった」とした子供の自由記述を見ると「町の音楽会へ向けてもっと頑張って上手になりたい」「少し緊張したけれど、歌や演奏がうまくいって良かった。そして、町の音楽会も上手にやりたい。」という次の音楽会に向けての意欲が見られた。この記述からは、良い取組みを行ってきたからこそ、今回の取組みに満足せず、次に活かそうとする意欲に繋がっているという解釈ができる。

表5 どんなところが成長したのかに関する記述

【技能】	<ul style="list-style-type: none"> ・口を大きく開けるところ。 ・今までできなかったところをうまくできた。 ・自分の思いを伝える正直者にできた。 ・大きな口で歌えた。 ・歌うのが前より好きに、上手になった。 ・きれいに歌えるようになったから。 ・だいたい、この音声がよくできていたこと。 ・大きな声で歌えるようになった。 ・大きな声を出せた。 ・音楽会をする前より鍵盤が上手くなった。 ・鍵盤ハーモニカのうまさ。 ・できる曲が増えたところ。 ・リコーダーで、きれいな音が出せるようになったし、歌もきれいな声で歌えるようになった。 ・きれいな歌声で歌えたから。ほくは、前までは、できていなかったけど、きれいに歌うコツが分かったところが成長した。 ・リコーダーを間違えないように吹けた。 ・自信を持って合奏ができるようになった。 ・いつも練習していて、悪かったところが良くなった。 ・指がすらすら動いた。 ・間違えたりしないところ。 ・リコーダーがきれいに吹けるようになった。
-------------	---

(20名)

【気持ち・自己承認】	<ul style="list-style-type: none"> ・緊張はしたけど、自信を持ててきた。 ・失敗しないで最後までやれた。 ・まちがえていたところがあったのに、なくなったから。 ・先生たちが「良かったよ」と言ってくれたところ。 ・声を治せた。 ・失敗しなかった。 ・緊張しなくなった ・でかい舞台でリコーダーをしたから、頑張りたい気持ちが成長した。 ・先生のお陰 ・先生が色々教えてくれた
【他者・協働】	<ul style="list-style-type: none"> ・みんなで声を合わせて、アルトとソプラノを合わせて歌えるようになった。 ・協力して声を出しきっていたから。 ・みんなとリズムを合わせられた。 ・みんなで歌うことで団結力が成長した。 ・みんなで協力して、どんな学校にも負けない音楽会に出来た。 ・みんなと協力してすばらしい演奏ができた。 ・みんなで協力、努力して、歌をきれいに、合奏をいつもよりうまくできた。 ・初めはみんなで合わせられなかったけれど、どんどん合わせられるようになったところ。 ・協力できて、音楽の大切さが知れたところ。 ・仲間と教え合ったり、協力しあったりできた。 ・みんなと合わせてできるようになった。 ・みんなと協力できた。
【練習・努力の成果】	<ul style="list-style-type: none"> ・練習してきた成果。 ・努力すればできるようになる。 ・音楽の大切さが知れたところ。 ・音楽が前よりも好きになった。 ・色々なことに自信がついた。

(10名)

(12名)

(5名)

(有効回答数 47名／49名)

ここでは「技能・気持ちや自己承認・他者と協働・練習や努力の成果」に分類した。「上手になった、できるようになった」という音楽的な技能の向上や「自信、協力、教え合い、団結力、音楽の大切さ」等、練習した成果や仲間との協働による達成感や満足感が得られていると捉えられる。また、個や集団での練習、仲間と共に音楽を生み出していく過程において、音楽することを通して多くの学びを得られたというコメントが見られる（表5）。

音楽会を終えてみての最終段階における感想では、「音楽的な部分」と「練習を通して得たもの」に分類した。音楽的な部分についてのキーワードやキーセンテンスは「声が揃った・色々な楽器の音が組み合わさった・楽器の音や声の音の重なりがきれい・息が合っている・楽しく感じた」などが多く見られた。練習を通して得たものについては「練習をすると自分の為になる・これからの勉強に活かせたらいい・皆で一緒に臨めた・大

切なことを伝えられた・仲間と協力して一つのものをつくりだした・緊張したけどすごく楽しかった・満足した・観衆から褒められたことが嬉しかった・次なる意欲」などが見られた。

全体を通してのコメントを考察すると、貴重な経験をしたという実感や今後への意欲が更に湧いてきた等、肯定的なものが見られる。また、自分自身や仲間と練習を積み重ねたことで自信に繋がったこと、仲間と一つのものを創り上げたという感覚を持ち、団結力を感じられたことなど他者との関わりを通じての成長が感じられるコメントが見られた。さらに、もっとやりたいという意欲や練習した分だけ自分に返ってくる、次の活動でも頑張りたいというような、最初の練習時よりも自分たちの上達を感じ取りつつ、子供たちが向上心を育んでいることが推測される。

3-2 教員間の連携に関するインタビュー調査

本研究では、子供たちが達成感や自己の成長を感じるために、音楽専科と担任の指導と支援が重要であると仮定している。実践的研究において、日頃の指導等によって設定された音楽経験から、子供たちが音楽の大切さを味わえた可能性がある。さらに、練習した成果から生まれる達成感や向上心などの肯定的な感情は、今後の様々な取組みに活かされることであり、目標を意識しながら持続した練習を行い、一人ひとりが成長する実感を味わえる為には、教師の指導や支援などが欠かせないと考えます。

そこで本実践においても、実際にどのような指導や支援を意識していたのか、教員間の連携を通して感じたことをインタビュー調査により明らかにしようと試みた。

表6 教員間の連携に関するインタビュー回答

【音楽専科より】

★指導で気をつけたこと、力を注いだこと

- ・なるべく子ども達がこんな風に歌いたい、演奏したいという気持ちを練習の中で聞いたり、考えさせたりするようにした。
- ・全体で合わせたときにスムーズにできるように、パートごとの練習時間もたくさんとり、それぞれのパートの出来具合をこまめに確認するようにした。
- ・練習していく中で、よかったと思った演奏に対して「今のよかった!」と分かるように褒めて伝えたり、何回か反復練習をさせたりして実感できるようにした。

★4年担任との連携について

- ・演奏曲目や練習方法、楽器のオーディション関係を決定するときに、自分一人で決めずに相談しながら決めた。
- ・パート練習のときに、練習方法を伝え、主になって練習を見てもらった。

★音楽会を通して子ども達が成長したこと

- ・自信を持って舞台上立っていた。
- ・練習の過程で、自主的に練習しようとする姿があり、意識の高さを感じた。

★そのほか感じたこと

- ・たくさんの先生方の協力がなければ成り立たないと改めて実感した。
- ・子どもには自分が演奏するのも大事だけど、他の友達の演奏を聴くこともすごく大事だと伝えてあげることが大切だなと思った。

【担任より】

★どんな関わりをしたか

- ・毎回のオーディション練習に参加し、アドバイスをした。
- ・楽器決めは、気持ちの面にも配慮した。

オーディションに受かった子には、「これがゴールではなく、スタート。学年の代表として臨むこと。」

オーディションに落ちた子には、「オーディションを受けたこと自体が素晴らしい。選ばれなかったからダメというわけではない。合奏全体を考えてより良い方を選んだ。どの楽器も合奏には必要なので、頑張ってもらいたい。」と伝えた。

- ・鍵盤ハーモニカの練習をみた。「先生がどんなに頑張っても、本番は出られない。あなたたちがやるしかない。先生と一緒に練習して応援することしかできない」と伝え、日替わりリーダーを決めて練習内容や合わせの時間を考えさせた。
- ・覚えるのに苦戦している子には、マンツーマンで見た。
- ・朝の会で歌ったり、演奏したりし、その後に一言アドバイスをした。

★音楽専科との関わりについて

- ・演奏曲目や練習方法、楽器のオーディション関係を決定するときに、相談しながら決めた。共通理解をもつて進めた。
- ・パート練習では、楽器をメインで見てもらい、担任がリコーダーと鍵盤ハーモニカを見た。
- ・技能面で疑問に思ったことは、すぐに確認するようにした。
- ・時間割を調整し、学年での練習時間できるだけ確保した。

★子どもの成長、変化

- ・初めは受け身的だった鍵盤ハーモニカの子達はリーダー制にしてから自主的に練習するようになった。
- ・保健室登校気味だった子が、オーディションや練習、本番を通して、教室に戻れるようになった。

教員間の連携では、複数の教員が分担し子供たちが複数に分かれて練習することが可能になることや、役割を分担することで子供への指導と支援が丁寧に展開でき、その結果、効果的に指導や支援を行えることがわかる。

- ・児童が複数の場所に分かれて練習 ⇒ 学級や学年の枠を外して活動
- ・複数の教員が協力して指導にあたる環境 ⇒ 学習活動を効果的に支援
- ・専門性を活かした指導 ⇒ それぞれの立場や役割を理解した指導

また、教員間で頻繁にコミュニケーションをとりながら情報共有を行い、互いに分からないことは相談し合う中で、子供にとって必要な情報や場面ごとにおける取組みの成

果、課題を確認できていることが伺えた。今回対象とした教員は全て若手（20代）教員であったが、それぞれの教員の特性や専門性、得意分野や経験を活かした協力体制が構築されたことによって、子供たちの学びへと繋がった可能性が考えられる。

担任は、音楽の時間も常に参加し、学年合同練習（音楽時間、特別教科）や休み時間（中休み、昼休み）も常に子供と関わりつつ、専科との連携を図っていたことが分かった。日頃から専科と担任が時間を共有することで、子供たちの練習時の楽器分担や子供の実態を把握できていた。担任が専科から指揮指導を受けたり、子供たちのパート練習の録音を一緒に行ったりしていた。担任が常に子供たちへの支援を行っていたことや専科と担任との教員間連携が、本対象児童における全体調査で達成度や満足感に繋がっていた可能性がある。

4. 考察と心理的分析

音楽会に向けての質問紙調査では、KJ法の分類により、①では「自己感情・承認欲求・他者との協力・客観的捉えと音楽的観点」といった表札を設定し、取組みが始まると、「意欲や気持ちの高揚・練習・協力して」という表札でまとめた。②では、練習が中心となっていることから「自己に関して・練習・合わせる・他者意識」の表札が設定できた。そして、③では「技能・気持ちや自己承認・他者と協働・練習や努力の成果」という表札が設定できた。つまり、学習活動過程における様々な問題解決場面において、イメージとしての意気込みのみであった意識が様々な問題に出会い、解決方法を見出していく記述へと発展していったと考えられる。そこでは、失敗を恐れ、不安に陥ることがありつつも他者との協力や仲間への所属、自分を受け入れ支援してくれる教師の安心感のもと、練習が行えていたものと考えられる。高坂（2011）は、共同体の測定尺度として「所属感・信頼感、自己受容、貢献度」を示しているが、本研究では音楽会の練習に取り組む過程において、自己肯定感や自己実現感覚の向上に繋がるような子供たちの所属感・承認・自己実現等のコメントが見えていることから、教師の連携が子供たちの学びに寄与した可能性が考えられる。

問題解決学習においては、問題に対して主体的・自発的な活動に向かわせることや自らの意思で参加することが求められる。さらに、学習する場の居心地の良さや、そこに子供たち自身の関心や期待感が存在することが重要となる。

手取（1993）は、「発見的ストラテジーは自主的に問題を解決していくための方略であり、様々な形態が含まれるが、基本的には①問題状況を分析し、②仮説を獲得し、またそれを吟味し、③解決計画の輪郭を描き、実行し、④解決経過と解決結果、場合によっ

ては修正するという一連の手続きからなっている」と立証している。また、問題解決能力の形成にとっての本質については、「目標—手段—条件—分析である」としたうえで、「内容的多様性、学習課題の複雑性の増大、関連づけられるべき諸知識と諸能力の抽象化水準と一般化水準に関しても拡張性をもっている。」としている。さらに、問題解決の情動的側面として、「問題の解決あるいは他の認知的要求の克服は、認知的諸操作と諸ストラテジーの援助でもって成功する（手取，1993）。」と示している。つまり、一人ひとりが問題解決に向かい、粘り強く活動を進める。また、教員は行き詰まりをなくするような指導・支援を行いながら問題解決に対しての達成感を味わわせる。解決することの価値や子供たち自身にとっての実現可能性への期待や、問題解決に必要な努力とその支えのサイクルが上手く回ることが求められる。音楽学習場面における問題解決について筆者はそのストラテジーを以下の図にまとめた（図2）。

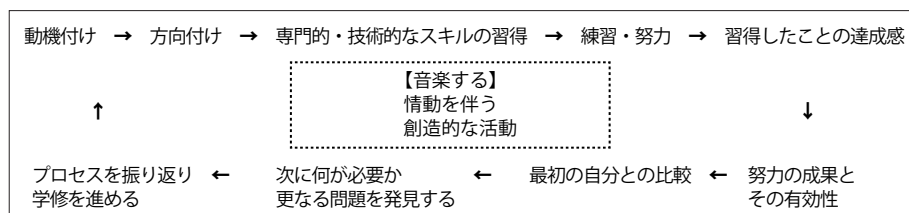


図2 音楽学習場面における問題解決ストラテジー

本研究では、自分らしさや自己の役割・責務（各自の楽器の役割や歌のパート）に対し子供たちの努力が見られ、最終的に協働による創出・表現が生まれた。音楽会に向けての学習過程においては、仲間と共に演奏することの意味を考えつつ、自己や他者との関わりや関係性の深まりが生まれ、それらが子供たち個々の目標や目的として内的に動機付けされ、個と集団の練習における他者との相互作用が発揮されていくことが求められる。

学習過程では常に音を媒体として活動していることから、その音についての創造的な学習となる。また問題解決および創造的な学習活動では、学習過程における個と集団の協働活動を伴う。色々な場面における問題を解決しつつ自己実現としての表現が表出されていくことや、そうした過程における教員の指導連携体制をどのようにデザインしていくかということも重要となる。

おわりに

本研究では、音楽会における子供たちの学習過程を分析し、4年次の発達段階に合わせた音楽会における音楽専科と担任の連携についての成果を明らかにした。欧米では、

音楽教育の効果の価値について指摘され、芸術で培った創造的思考力は、すべての分野で発揮できるものとされている。本研究の音楽会への取組みでは、芸術的な経験に加えて他者とのコミュニケーションや他者との協働を創発することができ、その結果として相乗的に創造的思考力を上げていく姿を明らかにすることができた。それと同時に、そういった学習過程の中における問題解決的な個々の取組みが、子供たちの学びを深化させている可能性も示すことができたと考える。

本研究では、若手の教員間の連携を軸に子供たちの音楽会へ向けての学びを調査した。しかし、取組みを全体的に分析していることから、個々の学びが十分に見えてこないところにこの研究の不十分さがある。今後、創造的学習活動における一人ひとりの問題解決的な学習場面を詳細に分析し、それらがどのような学びへと発展していくのかについて深めていくことを今後の課題とする。

【引用・参考文献】

- ・ D. A. Sousa (2017) 『AI 時代を生きる子どものための STEAM 教育 (訳: 胸組虎嵐)』 p.11, p.26, p.30, 幻冬舎
- ・ 国立教育政策研究所 (2016) 「平成 27 年度 全国学力・学習状況調査結果のポイント」, 文部科学省, p.3
- ・ 文部科学省 (2017) 「小学校学習指導要領」, 文部科学省
- ・ 文部科学省 (2019) 「学校における働き方改革について」, 文部科学省
- ・ 中村豊 (2016) 「文化的行事における学会の現状と課題: 大学生を対象とした想起方による質問紙調査結果の検討」 教育学研究, vol.8, pp.150-154, 関西学院大学
- ・ 菅野絵理子 (2015) 『ハーバード大学は「音楽」で人を育てる (21 世紀の教養を創るアメリカのリベラル・アーツ教育)』, アルテスパブリッシング
- ・ 高坂康雅 (2011) 「共同体感覚尺度の作成」, 教育心理学研究, vol.59, No.1, pp.88-99, 日本教育心理学会
- ・ 手取義宏 (1993) 「授業における問題解決の心理学的前提」 教育学論集, vol.19, pp.23-31, 大阪市立大学
- ・ 中央教育審議会 (2016) 「幼稚園, 小学校, 中学校, 高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について (答申)」, 文部科学省, pp.23-30
- ・ Y. エングストローム (2010), 『変革を生む研修のデザイナー-仕事を教える人への活動理論- (監訳: 松下佳代, 三輪健二)』, 鳳書房